

令和 6 年 5 月 6 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14157

研究課題名（和文）青年期の過剰適応を支援する「アタッチメント及び自律性支援ネットワーク」の実証研究

研究課題名（英文）Studies constructing "attachment and autonomy support network" for supporting over-adaptation in adolescence

研究代表者

風間 惇希（Kazama, Junki）

三重大学・学生総合支援機構・講師

研究者番号：70820364

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、青年期における過剰適応の支援・予防に資する『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』概念の理論構築とその有効性を明らかにすることを目的としていた。研究期間内において、（1）中学生から大学生にかけての青年期全般に適用可能な過剰適応尺度の開発、（2）『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の理論構築に関する研究、（3）青年期における過剰適応とアタッチメント機能・自律性支援の関連を検討するための3時点の縦断調査を行った。一連の研究を通して、青年期全般に適用可能な（他者との関係の中で生じる）過剰適応尺度の作成や、重要他者のアタッチメント機能・自律性支援の過剰適応との関連が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

不適応や精神障害等、心理社会的問題が生じた青年や成人の中には、周囲に適応しようとするあまり、自身の欲求や気持ちを過度に抑えてしまう「過剰適応」状態だった者がしばしば見られる。しかし、過剰適応状態にある青年の支援に資する知見はまだ少ない。また、過剰適応は実際の対人関係の中で生じる現象であるにもかかわらず、その測定尺度の多くは具体的な対人関係を想定しておらず、関係を特定できる測定尺度も中学生を対象にしたもののみである。本研究は、青年期における過剰適応の支援や問題発生の予防に資する『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』という理論構築や、その有効性についての実証研究を行った点で意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this studies was to develop a theory of the "Attachment and Autonomy Support Network" concept and clarify its effectiveness in supporting and preventing over-adaptation in adolescence. During the study period, three studies were conducted: (1) development of over-adaptation scale applicable to adolescents in general, from junior high school students to university students, (2) research on the theoretical construction of the "Attachment and Autonomy Support Network," and (3) longitudinal study of the relationship between over-adaptation and attachment function and autonomy support during adolescence. Through a series of studies, the creation of an over-adaptation scale applicable to adolescents in general and the relationship between over-adaptation and attachment function, autonomy support of significant others were demonstrated.

研究分野：発達心理学、臨床心理学

キーワード：過剰適応 青年期 アタッチメント 自律性支援

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

青年期は著しい生物-心理-社会的変化が生じる発達段階とされ、それに伴い様々な心理社会的問題が生じやすい時期である。近年では、青年の精神的健康の低さや青年期において精神障害が増加することを裏付けるエビデンスが蓄積されているが(e.g., 厚生労働省, 2018), 抑うつの高さや不登校等, 心理社会的問題を呈した青年の中には, 周囲に適応しようとするあまり, 自身の欲求や気持ちを過度に抑えてしまう『過剰適応』状態の者がしばしばみられる。特に不登校の文脈では, 「よい子」や「過剰適応型」と類型化される青年である。彼(女)らは, 内面に葛藤や問題を抱える一方, 問題なく生活していると見られることが多く, 援助の対象になりにくい特徴がある。したがって, 心理社会的問題のリスクファクターである過剰適応状態にある彼(女)らの適応が大きく破綻しないよう, 可能な限り早急に状態像や深刻度をアセスメントし, 支援することが喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究では, 青年期における過剰適応の支援や問題の予防に資する『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の理論構築とその有効性を検証するために, (1)中学生から大学生にかけての青年期全般に適用可能な(他者との関係の中で生じる)過剰適応の測定尺度の開発, (2)『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の理論構築に関する研究, (3)重要他者のアタッチメント機能及び自律性支援と過剰適応, 精神的健康の関連を検証するための縦断研究を行った。

3. 研究の方法

(1) 青年期全般に適用可能な過剰適応の測定尺度の開発

中学生 416 名, 高校生 408 名, 大学生 412 名の合計約 1236 名を対象としたオンライン質問紙調査を実施した。尺度項目については, 風間・平石(2018)や石津・安保(2008)、桑原(2003)の尺度を参照して項目選定を行った。(a)母親、(b)父親、(c)友人、(d)その他回答者が自由に設定した重要他者、の4者に対する過剰適応の程度を回答させ、尺度の信頼性及び妥当性を検証した。

(2) 『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の理論構築に関する研究

『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』概念の理論構築に向けて, アタッチメント理論や自己決定理論に関する文献、「自律性支援」研究に関する文献等のレビューを行った。

(3) 過剰適応とアタッチメント機能, 自律性支援, 精神的健康の関連に関する縦断研究

中学生・高校生・大学生(1 時点目:399 名, 2 時点目:296 名, 3 時点目:248 名)を対象とし, 3 時点(4 か月間隔)の縦断調査をオンラインにて実施した。今回は両親及び友人に対する過剰適応と, 第 1・2 愛着対象のアタッチメント機能及び自律性支援, 精神的健康を 3 時点(1 回目:2023 年 6 月頃, 2 回目:2023 年 10 月頃, 3 回目:2024 年 2 月頃)で測定した。

4. 研究成果

(1) 青年期全般に適用可能な過剰適応の測定尺度の開発

因子分析等の結果から, 想定する他者が異なっても「自己抑制」及び「他者志向性」の 2 因子に共通して高い因子負荷を示した 12 項目を, 青年期全般に適用可能な過剰適応尺度の項目として採用した。また, 先行研究に倣い, 「自己不全感」や「本来感」、GHQ 得点(精神的健康度)といった適応指標との関連を検討した結果, 先行研究と同様の関連も確認された。

(2) 『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の理論構築に関する研究

過剰適応状態にあると解釈される臨床事例(例えば, 杉原, 2001, 竹森, 2000, 杉岡・上村, 2011 など)の経過に関する記述を見ると, 過剰適応やそれに伴う主訴の改善に影響する要因の 1 つとして想定さ

れるのが、両親や支援者を中心とした身の周りの重要他者との受容的・理解的な関係の構築・再編成である。また、青年のありのままを受け入れたり、問題の改善に向けて動き出す児童・青年に寄り添い、後援する関係の中で、自律的・主体的な自己が醸成されていくということも、問題の進展に影響する重要な要因であることが考察される。

安心できる受容的・相互信頼的な対人関係とその関係の中で個人の自律性や自己が形成・発達すること、逆にそれらの不全に伴う精神病理は、アタッチメント理論 (McElhane et al., 2009) や自己決定理論 (Ryan, et al., 2015) の領域で議論されてきた。その中で特に注目される理論モデルの一つが、支援者と被支援者の二者関係の中で展開される双方向の助け合いのプロセスを説明するために提唱された「成人期における安心の輪 (circle of security in adulthood)」 (Feeney, 2004) である。このモデルに基づけば、青年が脅威やストレス等の問題を感じた際、両親や恋人、友人、その他支援者等の重要な他者との関係の中でその苦痛が緩和され (安全な避難所)、また安心感を得た後の青年による自己成長や探索、目標の追及を後援するような関係 (安心の基地) を持つことによって、青年の自尊感情や各種適応行動、well-being が促進されると理論的に想定されている。今回行った理論研究の中で導出された課題を踏まえ、現在『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の名称の再検討の要否も含め、説得力のある理論モデルの構築に向けて検討を進めている。

(3) 過剰適応とアタッチメント機能、自律性支援、精神的健康の関連に関する縦断研究

母親・父親・友人に対する過剰適応行動と、石津・安保 (2008) が過剰適応の構成要素に想定した自己不全感、重要他者のアタッチメント機能 (安全な避難所 (機能)、安心の基地 (機能) の2つ)、同じく重要他者から提供される自律性支援の時系列上の関連について、交差遅延効果モデルを用いた検討を行った。

図 1,2,3 には、過剰適応と重要他者のアタッチメント機能及び自律性支援の関連について、母親・友人・友人に対する過剰適応行動の3種類を区別して分析した結果を示した。(なお、重要他者については、質問紙調査にて母親・父親・友人・教師・恋人・その他の中から1名を選択し、アタッチメント機能及び自律性支援に関する質問項目に回答させたが、今回の成果報告では想定させた他者を区別せずに、重要他者のアタッチメント機能及び自律性支援として変数投入した結果を記載した。)

その結果、ストレス等を感じた際にその苦痛を緩和してくれる関係 (安全な避難所) が重要他者との間で築けているほど、母親に対する過剰適応行動が低減されることが示された。今後、想定された重要他者を区別した検討を進めていく予定だが、ストレス等の苦痛を緩和してくれるような関係を身の回りの他者との間で形成できていることは、母親との関係の中で自分を抑制しながら相手に迎合する過剰適応行動の低減に寄与する可能性が考えられる。

一方、青年の自己成長や探索、目標の追及を後援してくれる関係 (安心の基地) を重要他者との間で築いている場合、母親や父親に対する過剰適応行動が促進される一方、友人に対する過剰適応行動が低減されることが示された。こちらの結果についても、想定された重要他者との組み合わせを踏まえた検討を進めていく予定だが、青年個人の行動を後押しし見守ってくれるような関係を周囲の他者との間で形成できていることは、友人に対する過剰適応行動の低減に寄与する可能性が示唆された。

最後に、重要他者による自律性支援は、父親に対する過剰適応行動を低減させ、自己不全感を低減させることが示された。また、その自己不全感を媒介し、父親に対する過剰適応行動を低減させるという間接効果をもつことも示された。

(4) まとめ

以上の研究結果より、青年期の過剰適応と (重要他者の) アタッチメント機能及び自律性支援

の関連が明らかになり、本研究課題の目的、すなわち青年期における過剰適応の支援や問題の予防に資する『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』の有効性を支持する知見が得られた。今後は、引き続き縦断調査データの詳細な分析を進めることに加え、『アタッチメント及び自律性支援ネットワーク』という名称の再検討の要否判断や理論モデルの構築等を進めていく予定である。

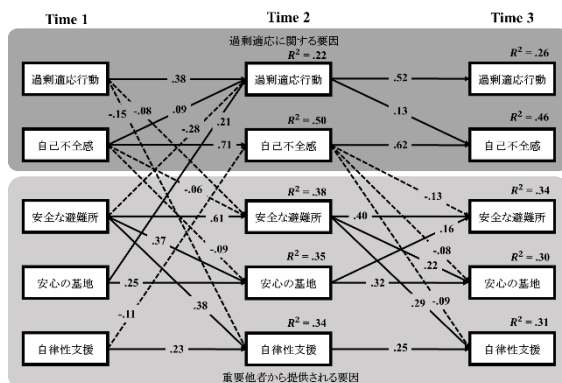


図1 母親に対する過剰適応とアタッチメント機能、自律性支援に関する交差遅延効果モデル

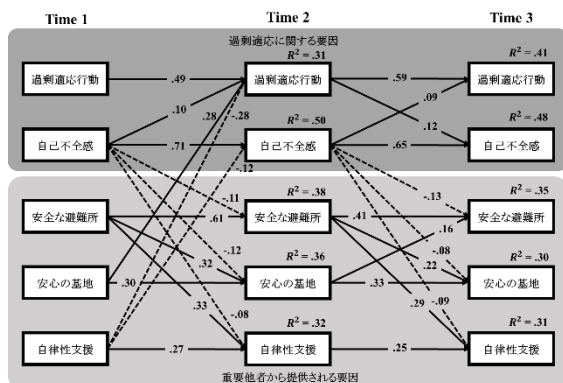


図2 父親に対する過剰適応とアタッチメント機能、自律性支援に関する交差遅延効果モデル

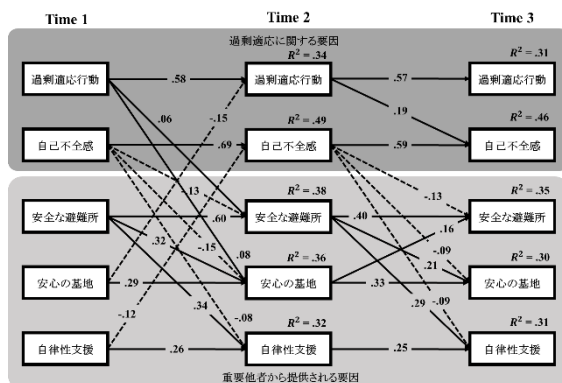


図3 友人に対する過剰適応とアタッチメント機能、自律性支援に関する交差遅延効果モデル

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 風間惇希	4. 巻 33
2. 論文標題 過剰適応研究についての進路選択と日中比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青年心理学研究	6. 最初と最後の頁 121-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------